

## 被災地 岩手、宮城を訪ねて

山陽新聞社会事業団専務理事 阪本 文雄



●特集● 東日本大震災から5年

取材先データ

### 釜石大槌地域障がい者 就業・生活支援センター「キックオフ」

〒026-0032 岩手県釜石市千鳥町1-12-2  
TEL 0193-55-4181 FAX 0193-55-4182

■社会福祉法人翔友（長谷川忠久理事長）が2010（平成22）年就業支援センターとして開設、翌年就業・生活支援センターに。同法人はほかに就労移行支援施設、就労継続支援B型事業所を釜石、宮古市で運営。長谷川氏が理事長を務めるNPO法人釜石市福祉作業所が就労移行支援、A型、B型事業所を運営している。

### マルハニチロ株式会社 石巻工場

〒986-0834 宮城県石巻市門脇町3-1-28  
TEL 0225-22-3111 FAX 0225-22-3115

■1946（昭和21）年、日魯漁業久里浜支社石巻事業所として発足。現在、イカ、エビ、白身魚などの市販用冷凍食品と業務用ツナマヨネーズ、塩蔵タラコ、裏ごしタラコなどを年間64万ケース生産。2017（平成29）年、同市須江地区へ新築移転する予定。

### 株式会社ヤマサコウショウ

〒986-0015 宮城県石巻市吉野町3-1-43  
TEL 0225-23-0151 FAX 0225-95-8738

■1934（昭和9）年、佐々木孝彰商店を創業。戦後、魚肉すり身、各種切り身、粕漬、鶏肉すり身、煮タコ、タラコ、カニなど食品加工工場を相次いで増設し業務拡大した。東日本大震災で工場半壊、製造・営業停止したが、年内に操業再開、翌年には本社完成、直売店販売開始。その後、笹かまぼこ工場を新設した。

**東日本大震災**  
2011（平成23）年3月11日14時46分、太平洋三陸沖を震源にマグニチュード9の大地震が発生。その影響で津波が起きて、最高8mの高波が沿岸部の町を襲い、濁流が多くの人々の生命を奪った。岩手、宮城、福島で1万8000人を越す死者行方不明者、家屋の全半壊など大きな被害が出た。



### 編集委員から

震災後3年で福島県、今回、5年後で岩手県、宮城県を回った。障害者の実雇用率は震災前のレベルに回復しその後着実に伸びていた。90%が職場復帰し、新しい職場でも働いている。さらに精神障害など新規就労者が加わり雇用障害者数は確実に増加していた。

石巻市は、平成26年～29年までを「震災前の活力を回復し地域の活力を高める再生期」と位置づけており、人手不足の職場では障害者雇用が活用され、再生の戦力になっていた。多くの課題を抱えながら、働く障害者の姿を被災地で見たと。

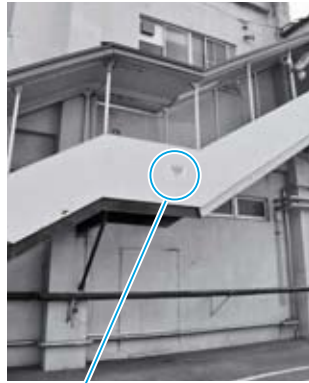


（写真） 小山博孝

Keyword : 身体障害、知的障害、精神障害、製造業、就業・生活支援センター、ハローワーク



冷凍イカの検品作業をする千葉薫さん(41歳)



石巻工場の事務所棟の階段に、津波到達ラインが示されている



原料出し作業をする八木祐太郎さん(24歳・右)



石巻工場製造ライン(右)と、つくられる冷凍食品(左)



回り、労働状況は3年で復旧したといえる。この年、法定雇用率が2・0%になったこともプラスになった。26年1・93%、27年1・99%と好調に推移して再び右肩上がりのラインに戻った」という。

## 岩手から宮城県石巻市へ

岩手県から宮城県に入り石巻へ。石巻港へ行くとき高さ7〜8mの防潮堤が万里の長城のように海に沿って延び、工事が進んでいた。ここは三陸沖の震源地(牡鹿半島東南東130km)に近く震度6強、津波の高さは最大8・6m、強い勢いで濁流が流れ込み、浸水は市内の平野部の約30%におよび、死者3178人、行方不明422人、建物被害は全壊、半壊、一部損壊は全住家数の76・6%。大震災の最大被災都市である。

石巻港の一角、北上川の河口に面した石巻市門脇町、「マルハニチロ株式会社石巻工場」を訪れた。

工場前の川沿いに立つと「東日本大震災の水位5・5m」の表示板が頭上にあつた。小瀬政憲総務課長が「この地点は平屋建ての工場の屋根のすぐ下まで津波が来しました。船も流れ込んできました。工場4棟のうち3棟が全壊、2階建て事務所棟、工場1棟だけが残りました。北上川東岸の工場1棟も全壊でした。地震直後、門脇町の工場に働いていた従業員の被害はゼロでしたが、東岸の工場から避難中の方、夕方から

のシフトに合わせて出勤途中の方、計8人が津波の犠牲になりました」と当時を振り返る。

5カ月間の休業後、事務所、冷蔵庫、1工場を復旧。現在の生産規模は震災前の20〜30%。400人いた従業員は山形などグループ工場へ転籍し、いまは150人体制。震災時、4人の障害者が就労していた。聴覚、視覚、肢体不自由2人。全員無事だった。このうち1人が退職、2人は山形へ移り、1人が残った。現在、当時の就労人数に戻り、聴覚、肢体不自由と知的障害2人の4人が現場勤務している。

「いか天ぶら」、「白身&タルタルソース」、「プリッと大きなえびチリ」などの冷凍食品をベルトコンベアで生産。原料を出す工程は10度前後、フライをあげる工程は180度の高温、厳しい衛生管理のもと、ていねいな食品づくりが行われていた。八木祐太郎さんは平成26年6月から冷食係勤務、原料のイカや白身魚を袋から出す作業とでき上がった製品の検品を担当している。「原料出しではイカの硬いのを取り除き、検品ではあげ色を見て濃過ぎないか、適温か、変形してないか、短時間で判断し処理する。結構、大変ですが、がんばっています」。自宅からマイカー通勤、休みの日はドライブ、映画、買い物、読書という24歳。仙台の職業訓練施設を経て園芸の仕事から現在の職場へ。

同じ担当の千葉薫さんは勤務2年が過

ヤマサコウショウの現在の第二工場（右）と  
震災直後の工場（左）



津波に襲われた工場と周辺

◀写真提供：(株)ヤマサコウショウ

## 全体としては回復しつつも 支援を要する課題は多い

続いて地場の水産加工食品の株式会社ヤマサコウショウ（石巻市吉野町）を訪ねた。

どんな商品が知りたくて、直売店へ入ってみた。「宮城名産牛たんつくね」、「笹かまぼこ」、「本ずわい蟹爪肉」、「たら子」、「釜茹でえび」などがショーケースに並んでいた。「酒のあてにいいねっ」とつぶやく客の声が聞こえた。やっとイメージがわいて事務所へ。障害者雇用の窓口になっている

きた。就労支援施設から就職、会社勤めは初めて。「検品が思うように進まないときがあるし、原料出してくっついたイカがうまく離れない事があるし、1日終わると疲れたと思う日もあります。まあ、周りの人たちのコミュニケーションは少しずつうまくいくようになって、職場が楽しくなっています」。41歳。工場の送迎バスで10分の所に両親と住む。震災時は仙台でボランティア活動中だった。JR仙石線の線路づたいに歩いて翌朝5時過ぎ帰宅、何も食わず、手も冷たくなっていたという。

石巻工場は、津波被害のない内陸部への移転計画が決定。「うちの工場にとって、移転して初めて復旧したことになります。生産量を増やし、従業員、障害者雇用も増員することになるでしょう」と小瀬さんはいう。

事業部の佐藤茂課長が対応してくれた。「震災で工場が大きな被害を受けました。社長の言葉でいえば、絶望的な状況でした。最大被災都市石巻のなかでも、うちの会社と工場は海岸まで1〜2kmですからたいへんでした」と。

半年休業の状態で見通せず、180人いた従業員は復興要員を残し一時解雇（のちに再雇用）に。「この半年のブランクは大きく響きました。お客さんが離れてしまい、操業を再開し手繰り戻すのに大きな力が必要でした。いま80%は戻りました」。従業員の再雇用も同じだった。同業他社へ流れたり、他業種、さらに内陸部の事業所へ。新規採用で埋めようとしたが、足りない。20年近く勤務していた障害者がいたがやめてしまった。就業・生活支援センターの知り合いが、「面接会があるからもう一度チャレンジしては」と誘いの声をかけてくれ、社長も社会貢献につながると賛成、昨年からは障害者雇用を本格化した。

新たに4人を受け入れ、現在5人が働いている。障害は精神、知的各2人、身体1人。工場で原材料の運搬、投入、容器の洗浄作業を担当している。井上恭子さんはちょうど1年になる。前は介護職でデイサービスセンターに5年間勤務していた。ハローワークでこの会社を知り、就業・生活支援センターに登録、面接会へ参加、就職が決まった。「やっと1年たって慣れてきた。仕事は機械にあわせる